

心木木だより

—— 友の会会員の皆さまと記念館を結ぶ会報誌 ——

vol.46
2023 秋号



すずき出版発行「心のうたかれんだあ」(平成8年版)より 詩／坂村真民「あだし野の露のように」 画／海野阿育

坂村家のアルバム

vol.16

女学生の憧れだった青年真民

白鷺飛翔

新しい天地を求めて、朝鮮へ渡っていった。だが、そこにみたのは貧しい民のくらしだった。いたみつけられた民のなげきだった。白鷺は白い服を好む民族のかない象徴かとも思えた。この地はわたしの第二の故郷といつてもよい。

白鷺の群れて飛びゆく空の曇

夕日にあかくそまりながるる

白鷺はわれのかなしき化鳥かけりょう

昼のひかりに飛ばば思ほゆ

暖かき生

母の手一つで育てられたわたしには、女子の教育は報恩であり願望でもあった。わたしは一途に内鮮共学※の学園に若い瞳を燃やした。わたしの一番たのしい教員時代であつたらう。



若き日の真民

今号は、父・真民の若き日の写真と短歌4首を選びました。これらの歌には青年真民の純な心が溢れています。歌集「石笛」（昭和37年発行）を簡単に紹介しますと第一部（昭和4年〜17年）と第二部（昭和21年〜25年）にわかれ、詠まれた内容によって小題がつき、『白鷺飛翔』に17首、『暖かき生』には12首が納められています。この小題の説明文から、当時の真民の心構様が伝わって来ますね。

昭和9年「朝鮮公立高等女学校教諭二任ズ」ということにて、海を渡りました。―わたしは25歳の時、日本を脱出するような気持ちで朝鮮に渡り、この地に骨を埋めるつもりでいた―と書いています（随筆集『愛の道しるべ』より）。次

第に自由が狭められてゆく、そういう空気に敏感な真民は、日本本土をつつむ雲行きに息が出来なくなっていたのでしよう。

春4月、梨の花の白さに、真民は迎えられました。まず新設の全羅南道順天女学校の教員となり、9月には忠清北道清州公立高等女学校に転動します。この学校で、ベートーヴェンという綽名を貰いました。掲載の写真を見てくださ。現代人がイメージする長髪とは似ても似つきませんが、当時の世相にしてはとも長い髪で、音楽室に掲げられたベートーヴェンの額に、夢見る女学生は重ねたのでしよう。17歳の時、師範学校の入学試験を受けて音楽で失敗して以来、自分は音痴だと言っていた父ですが、彼の不屈と気概とを尊敬していたため、この渾名はありがたかったとか。

一方で、この髪型で汽車や船に乗ると、移動警察に呼び止められ何時も調べられたそうです。危険な思想を持つ人物と見られた訳です。しかし、こういう事が起きても髪を短くする人ではありません。終生、納得出来ないまま従うことを良しとしない父でした。

ここで、真民に教わった女子生徒の手紙（私に

表紙の詩



あだし野の露のように(65歳)
 あだし野の無縁仏群の
 前に立っていたら
 なぜかあなたのこと
 思い出されてならなかった
 というお便りをいただき
 わたしの体のなかにも
 阿修羅のようなものが
 ながれてきました
 千年も雨に日にさらされ
 立ちつくしている
 有にして無
 無にして有の
 無数の存在仏の空しさが
 この瘦せたわたしの体を
 吹き抜けてゆく思いがしました



(中略)
 あだし野の露のように
 あとかたもなく
 消えてゆきたいものをと
 無数の無縁仏たちは
 ひたすらの思いで
 立っているのではないでしょう
 か
 「全詩集3巻」158ページ
 「自分の花を咲かせよう」44ページ

この詩は、真民が65歳の時の詩です。詩の冒頭に
 ありますように、読者の方からの手紙に触発されて生
 まれた詩です。

化野(あだし野)の無縁仏群とは、京都嵯峨野の化
 野にある念仏寺の境内に配列されている、無数の無
 縁仏のお墓のことですね。この地は古来より葬送の地
 で、あだし野の山野に埋没散乱していた石仏・石塔を
 地元の人々の協力を得て、念仏寺に集めたものです。

真民は、そうした無数の無縁仏の空しさ、はかなさ
 に心を寄せて、無縁仏は、露のようにあとかたもなく消
 えてゆきたいと思っているのではないかと、思ったので
 しょう。

※内鮮共学…日本と朝鮮の生徒が共に学ぶ

われを見てつとはぢらひてそれ

ゆきし娘の感情を思ひみむとす

をとめごは春の雪ゆゑもろきゆゑ

守りて吾はゆく白玉のごと

「歌集 石笛」(1962年1月発行)より

想い出を書いて送って下さったもの(を)を一部抜粋
 して紹介しましょう。

昭和10年女学校3年生の時、国語の先生と
 して内地から新しく赴任して来られた、お若い
 独身の先生であられたことが全校生の憧れと
 なってしまったことは今も忘れられませんが。

廊下を掃除道具を下げて、ふと前方からお一
 人で先生が歩いて来られるお姿に息の止まる
 ような思いで通った経験がございます。 — 略
 — 先生が御結婚と同時に、お洋服にアイロンが
 びし!とかがっておられ、多くの片思いの生徒が

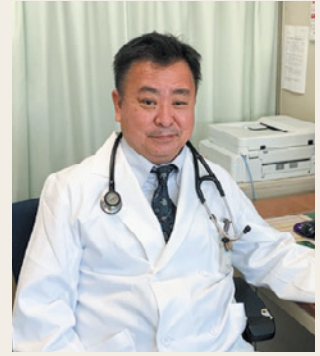
(私も)はじめて自分に向けはじめだったのでな
 いかと思います。以上が私の少女時代の懐かしい
 思い出でございますが、当時先生の御人格が多く
 の生徒に夢を持たせ国語の勉強を楽しみ、一生
 懸命だったことを深く感謝いたしております。 —
 この清州公立高等女学校は、戦後「懐風」と
 称した同窓会が日本でまた韓国でと続きます
 ので、私も卒業生とのご縁が出来ました。しば
 らくは、この清州での日々を綴ってゆきたいと考
 えています。

この手紙にある真民の結婚話・久代の登場は
 次回に。
 文／西澤真美子

真民先生との思い出

砥部病院院長 中城 敏

青春時代に真民詩のファンとなった中城さんは、「念ずれば」の一念で真民さんと出会えたという。主治医として真民さんに最期まで寄り添い、現在は真民さんのやさしい世界に触れて欲しいと、若い研修医を連れて記念館を訪れる。



◆「念ずれば花ひらく」先生との出会い

坂村真民先生の詩に出会ったのは、私が高校生の時です。もう、半世紀も前のことになりましたが、当時大街道にあった明屋書店（はるや）の二階、右側の奥で偶然詩集を見つけました。「自選坂村真民詩集」だったと思います。先生の詩は純真な少年（私のことです）の心に響きました。

あれからずっと先生にお会いしたいと思っていました。平成12年から、砥部病院に勤務するようになり、私の思いは、募るばかりでした。

「念ずれば花ひらく」とはこのことをいうのでしょうか、平成16年11月30日、外来に坂村昂（たかし）というご老人が美しい娘さんに連れられて、インフルエンザのワクチン接種に來られました。その風貌から、「学者をされていたのでしよう」と私が聞くと、「いいえ、私は詩人です」と言われました。

私は思わず「真民先生ですか」と叫び、先生に抱きつきました。先生は直立不動のままでした。私は、高校生の時から先生のファンであることを熱く語りました。

次の日、娘さんが、「念ずれば花ひ

らく 鳩寿五（95歳）」と書かれた書を持って来てくださいました。早速それを京都に送り、表装して先生にお見せすると「見事な表装である」とお褒めくださり、箱書きまでしていただきました。

◆先生のやさしい世界を知ってほしい
以後約2年間、真民先生の主治医となり、徳本福子総師長と往診に行くようになりました。

真民先生からは、白神山地のブナの原生林の話、中学4年の軍事教練の話、朝鮮半島で一兵卒の真民先生が大將に間違えられた話、吉田町の大乘寺に女学生と座禅を組みに行った話など、いろいろな物語を聞かせていただきました。

先生は「良い医師に出会って、生きる希望ができた」と、私には身に余る詩を書いて下さいました。

砥部病院には、何回か入院されましたが、ある退院の日、「天上天下、至福の至り」という、色紙を書いていただきました。私は先生の詩の中に、「尊いのは足の裏である」があるのを思い出し、記念に足形も取らせていただきました。足の裏に水を塗らせていただいた時、こそばゆかったのか、「う

ひゃひゃ、こんなことされるのは初めてじゃ」と言われました。この2点は坂村真民記念館に寄贈しました。

100歳まで生きると言われていましたが、私の力及ばず、平成18年12月11日午前4時40分、当院にて、静かに息を引き取られました。97歳と11ヶ月でした。

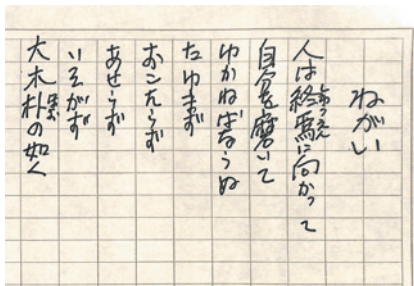
多くの人々が、先生の詩によって、生きる喜びや希望を見出してきました。見事な一生を貫いた方の立派な最期を見届けさせていただきました。

坂村真民記念館に行くと、今も、先生がそこにいらつしやるような気がします。だから私は砥部病院に來た研修医たちを、必ず真民記念館に連れて行くことにしています。彼らが真民先生の世界に触れて、ふんわりとした優しい気持ちになってくれれば良い、歳を重ねることのすばらしさを感じ取ってくれば良いと思っています。

さらに、真民先生の「よい本を読め、よい本によって己を作れ。心に美しい火を燃やし、人生は尊かったと叫びしめよ」（六魚庵独語）を紹介し、自分も戒めることにしています。

西澤館長の好きな真民詩

「ねがい」



最近見つけた詩で、こういう生き方をしたいと思う詩です。

河野の好きな真民詩

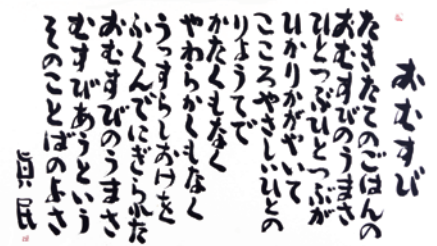
「闇と苦」



つらいことがあった時、乗り越えればきっと良いことがあるから頑張ろうと思わせてくれる詩です。真民さんだからこそ説得力のある言葉だなと思います。

篠原の好きな真民詩

「おむすび」



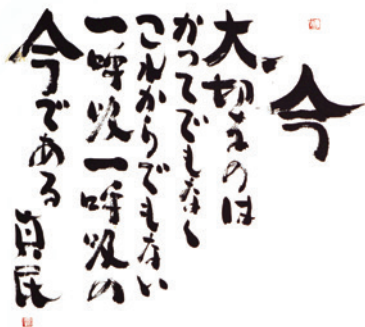
たきたての…から本当においしそうなおむすびが目に浮かびます。題名が「おにぎり」ではないところに真民さんの思いを感じ、あたたかく幸せな気持ちになる詩です。

記念館スタッフの

私の好きな真民詩

武丸の好きな真民詩

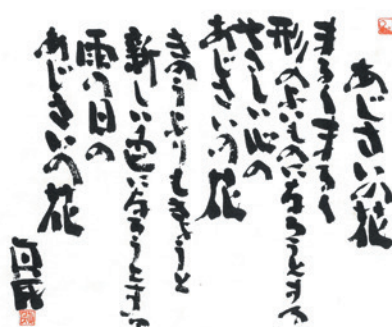
「今」



過去を悔やんだり、未来に期待を寄せるよりも、一呼吸一呼吸を大切に、今この瞬間をしっかりと過ごしていけたらと考えさせられる詩です。

樋口の好きな真民詩

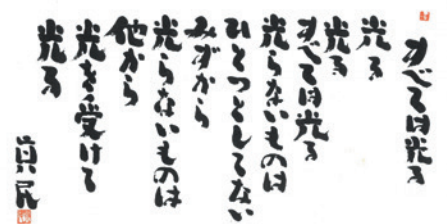
「あじさいの花」



「まるくまるく」の所が、やさしい感じで好きです。雨の日のあじさいの花の様子が目に浮かぶ、きれいな詩だと思いました。

山本の好きな真民詩

「すべては光る」



自分一人で頑張らなくてもいい。無理な時は、他の人に助けられてもいい。と思えた詩だからです。

坂村真民記念館を応援しています



『木は氣なり』

百年の木には百年の氣が宿り

千年の木には千年の氣が宿る

鳩寿四 真民詩

南木曾木材産業株式会社

〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻1187 代表取締役 柴原 薫

TEL 0264-57-4000 FAX 0264-57-2006 <http://www.nagiso.co.jp> メール kao@nagiso.co.jp

砥部の地で、医療、看護、介護の三位一体を実現する砥部病院



介護付有料老人ホーム
To-be

全78居室/20㎡~24㎡(1F&2F)



住宅型有料老人ホーム
モンレーヴ砥部

全18居室/40㎡~90㎡(3F)

伊予郡砥部町麻生51-1(砥部病院西隣) TEL.089-969-0085 砥部病院ケアサービス株式会社

サンマーク出版 坂村真民の本

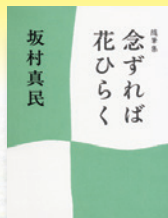
詩墨集
筆の詩墨の花



●定価=本体 3500円+税

坂村真民記念館
所蔵の作品を満載!

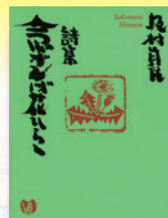
随筆集
念ずれば花ひらく



●定価=本体 1800円+税

初めての
随筆集を復刻!

念ずれば花ひらく



10万部突破の
超ロングセラー!

いま届けたい、生き方の道しるべ



詩集 ●定価=本体各1000円+税



詩集 二度とない人生だから

サンマーク出版

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-16-11
TEL 03 (5272) 3166 FAX 03 (5272) 3167
<http://www.sunmark.co.jp>

広告募集中

「タンポポだより」に広告を出してくださる
企業・団体等を募集しています。

[広告料]

1枠(タテ60mm×ヨコ170mm) …… 年間10万円

- 年間発行部数/2,000部(年4回発行)
- 送付先/友の会会員、県内社会教育施設、県内旅行・観光業者等その他、記念館の来館者に配布

「タンポポだより」の発行費用は、この広告料で賄っています。それによって、友の会の会員の皆様からの会費は、タンポポだよりの送付料や記念館の活動経費に充てることが出来ます。記念館の活動を充実させるためにも、広告料収入が必要不可欠です。どうぞ、このような趣旨をご理解くださり、広告掲載へのご協力をお願いします。





書店では手に入らないながらも、
口コミで増え続け、
11万人に定期購読されている
日本で唯一の
人間学を学ぶ月刊誌です



月刊誌「致知」
有名無名やジャンルを問わず、
各界各分野で一道を
切り開いてこられた方々の
貴重な体験談を
毎号紹介しています。

致知出版社

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-24-9
TEL.03(3796)2111 (平日9:00~17:30) FAX.03(3796)2108

致知 検索



坂村真民記念館友の会 会員募集中

坂村真民記念館友の会は、会員の皆様と記念館との交流を図り、記念館を共に支え、育てていくことを目的とした会です。入会された方には会報と、真民グッズなどの記念品を贈呈します。

パスポート会員 年会費2000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
一般会員 年会費5000円	特典 会員証で入館無料1人 ほか
特別会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人 ほか
法人会員 年会費10,000円	特典 会員証で入館無料2人、 観覧券10枚贈呈 ほか

詳しくはホームページをご覧ください [坂村真民記念館 友の会](#) [検索](#)

〈編集後記〉

前回のタンポポだより夏号にて、ボランティアガイド養成講座募集(毎土曜日)のお知らせを載せました。なんと始めて、高校生の方が手を挙げて下さいました。若い人達が大好きな真民でしたので、喜んで陰ながら応援してくれていると思います。若者たちに期待します。(真美子)

タンポポだより vol.46 秋号

令和5年9月1日発行
発行元/坂村真民記念館友の会事務局
〒791-2132 伊予郡砥部町大南705 坂村真民記念館内
TEL089-969-3643 FAX089-969-3644

〔坂村真民記念館〕

開館時間/9~17時(入館は16時30分まで)
休館日/月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、12月29日~1月1日
入館料/65歳以上300円、一般400円、高校生・大学生300円、
小・中学生200円 ※15人以上の団体は割引あり